

リディア・M・チャイルド『共和国ロマンス』論

——ゴシック・ロマンス，その皮膚とその血と——

上野和子

Lydia Maria Child's *A Romance of the Republic*:

Read as a Gothic Romance of Struggle within White Skin and Bloodline

Kazuko Ueno

Abstract

This paper describes reading *A Romance of the Republic* as a Gothic romance, revealing the slavery system as a cruel means of repressing human beings to a level below animals and of sexually exploiting black women. One of the leading members of the abolitionist movement, Lydia Maria Child, wrote this novel in 1869 not only to open the road toward admitting the miscegenation of the times but also to underscore the social value of giving educational and vocational training to black people. Child sets the beautiful octroon sisters, being as very light-skinned as white women and gifted in music and art, as the heroines of this narrative. Brought up in a secluded mansion in the suburbs of New Orleans, the sudden realization that they had become slaves on the death of their father befalls them. The narrative begins with their struggle to escape from the bonds of slavery to gain their freedom. The stark realism of the story works to subdue the high spirit of Child's ideal for the Republic. Yet the narrative illuminates for us the superb gothic literary entertainment of escape and pursuit, white-skinned black beauties pitted against a white villain, their encounter as an opera singer and as an audience member, and the exchange of black and white babies, all set in such international cities as Boston, New York and Rome.

はじめに

リディア・マリア・チャイルド (Lydia Maria Child 1802-1879) は、小説『共和国ロマンス』(*A Romance of the Republic*, 1867) を執筆した時、小説、詩、童話などの文筆家として、また女性運動、奴隷制廃止運動の指導者のひとりであったⁱ。彼女の人生を奴隷制廃止運動家として決定づけたのは、1834年『アフリカ人と呼ばれるあのアメリカ人の階級のための抗議文』(*An Appeal in Favor of That Class of Americans Called Africans*) の出版からだった。これは奴隷廃止を訴えたアメリカ初めての著書であり、特に、アフリカ西岸と西インド諸島を結ぶ中間航路 (Middle Passage) における残虐非道の奴隷貿易が、アメリカ東部の知識人を戦慄させた。

これによりチャイルドは、ユニテリアン牧師エラリー・チャニング (William Ellery Channing) や上院議員チャールズ・サムナー (Charles Sumner) など北部の知識層を奴隷廃止運動に引き込んだが、その一方、南部との貿易に携わる北部の国会議員や企業家から迫害をうけ、瞬く間にパリア (Pariah) の身分に落ちたⁱⁱ。家族や友人に締め出されただけでなく、激しい社会攻撃によって編集を務めた児

童雑誌「ジュヴェナイル・ミセラニー」(*Juvenile Miscellany*)は購読停止が急増し、家事に関するマニュアル本『儉約上手な奥さん』(*Frugal Housewife*, 1829)、育児書『お母さんの本』(*Mother's Book*, 1831)は返品の山となった。

それでもチャイルドは、ガリソン(William Lloyd Garrison, 1805-1879)などの支援で奴隷廃止運動を継続し、南北戦争後は解放奴隷のための教育・福祉・職業斡旋などの活動をした。ガリソンやウェンデル・フィリップス(Wendell Phillips, 1811-1884)同様、奴隷解放運動では、即時全面的解放を掲げるチャイルドは、当時としてはその過激とされる意見から非難を浴びたが、その論旨は常に合理的で明快であった。当時も現在も理想主義的で普遍的であり、常に時代の先端を行っていた。その彼女の姿勢が、ジョン・ブラウン(John Brown, 1800-1859)蜂起の擁護ⁱⁱⁱであり、リンカーン大統領に奴隷解放宣言や南部諸州の土地没収法(1862)を促し、この小説『共和国ロマンス』で異人種間結婚(miscegenation)の主題を取り上げさせたのだ。

チャイルドは、人種差別や偏見をなくすためには、黒人と白人の結婚(miscegenation)が、優れて有効かつ平和的な手段であると、固く信じていた。南部の奴隷所有者たちは黒人が自由になると、白人と黒人の結婚が増加すると煽動し、無知で無教養な人々を恐れさせた。南北戦争初年度の1862年9月に彼女は、このテーマ「解放と異人種間結婚」(Emancipation & Amalgamation)をニューヨーク・トリビューン紙に発表した。以下の引用はその一部である。

私は、肌の色に対する偏見がまったく(白人の)思い上がりから生じており、我々の法律や慣習が黒人に強制してきた品性の欠けた賤しい生活によるものだと思っている。これは、奴隷所有者が非合法の結婚を恐れないのに、合法的な黒人との結婚を非常に恐れる事実に十分な証拠がある。彼らは、万一、自分の息子がきわめて美しい知的な黒人の混血児と結婚したら、一生家族の恥であると考えるだろうが、〈石炭のように黒いローズ〉を母に持つ非合法の子どもたちを持つのは何とも思わないのだ。(p. 263)^{iv} ()内は筆者の加筆

チャイルドは、南北戦争後、人心が「復興期」から逸れた時、評論よりも小説の方が人種問題を理解しやすいのではないかと思ひ、『共和国ロマンス』を執筆したと言われている。もちろんストウ夫人の『アンクル・トムの小屋』(*Uncle Tom's Cabin*, 1852)の人気やニューヨークのウィンター・ガーデン・シアター(Winter Garden Theater)で評判の芝居『オクトルーン』(*Octoroon*, 1859)^vがその背景にある。

この物語は、当時南部で施行されていた異人種間結婚、黒人と白人の結婚禁止条項に反対し、人種差別の抑圧と奴隷制度の残虐性を世に訴えることであった。チャイルドは主人公の姉妹を肌の白いオクトルーン(Octoroon, 8分の1黒人)(資料1)に設定し、アメリカ社会の孕む白人優位主義が奴隷制度・家父長制度と複雑に絡む様々な問題を提示したのだが、チャイルドの主張通り実際に起こった事に基づいているとは言え、最終的には極めて美しい女性の結婚で終わる物語は、その一方で、登場人物の夢や、理想化された共和国への期待として、またアメリカ社会の急激な変化と混沌の恐怖を映す鏡として、slave narrativeの典型的なゴシック・ロマンスとなった。そのため、アメリカ流のロマンスの伝統、ホーソン(Nathaniel Hawthorne)の『緋文字』(*The Scarlet Letter*, 1850)の序文「税関」^{vi}で述べられた‘the Actual’と‘the Imaginary’の中間地点、また「現実」と「おとぎの国」を行きかう世界のようにも、またRichard Chase^{vii}の言うアメリカ型のロマンスの流れに向かう作品となった。つまり、作品はヨーロッパのゴシック作品にみられる現実逃避(escapism)、幻想

(fantasy), 感傷性 (sentimentality) などとは全く異なる効用をもち, その逃亡と追跡などの「急激な筋の展開」(rapidity) 故に, また「多重層的な認識=皮肉」(irony) の中で逡巡し, 高雅な理想を目指す「抽象性」(abstraction) を含み, 知的な「深淵さ」(profundity) 等の特徴を持つのである。作品は, 華やかなオペラ・ハウスや自然豊かなニューオリンズの館を背景に, また, 国際都市のニューオリンズ, ローマ, ボストンを舞台に, 黒人奴隷である白い肌の「美女」と白人の奴隷所有者の「悪漢」が相抗い, さらに白人の赤子と黒人の赤子の取りかえ事件など, アメリカ特有のゴシック小説となった。この抗争のなかで, 奴隷制度における不合理な肌の色の論理, 白人優位主義社会と父権制社会の類似性・残虐性がはしなくも現前する。現実に恐怖する登場人物とチャイルドの理想, 自由を求める, 希望が時空を越えた普遍性をもって作品に提示される時, 『共和国ロマンス』は極めて高度なゴシック・ロマンスのエンターテインメントとなった。

チャイルドの伝記作家キャロライン・カーチャー^{viii}は, テーマやヒロインの設定に不満を呈しながらも, 小説『共和国ロマンス』は19世紀のアメリカ社会を描いて, 奴隷制度に関わるその広範で多様な人間模様の成長や挫折, 限界などが, チャイルドの評論『アフリカ人と呼ばれるあのアメリカ人の階級のための抗議文』に匹敵する力強い作品であると評価している。なお, この作品の出版後, 白人のように教育され肌の白い黒人が結婚や職業を求めて懊悩し, 白人として白人社会に生きる passing をテーマにした悲劇が多く書かれた。当時の州法では一滴でも黒人の血が流れている人間は, 黒人として扱われた。白い混血児が黒人であることを表明するのは, 努力を重ねて獲得した職業や結婚のもたらず文化生活から一瞬にして閉ざされることを意味する恐ろしい瞬間なのだ。従って, 虚構でも現実でも, 誠実に自分が黒人であると告白する多くの混血児は物質的にも精神的にも破滅させられ, 自殺に追い込まれる事例が多かった。それ故, 自己を貫き黒人社会の道を歩む肌の白い黒人女性の物語は, 25年後, アフリカ系アメリカ人の女性作家フランシス・ハーパー (Frances Harper) の『アイオラ・リロイ』(Iola Leroy, 1892)^{ix} を待たねばならなかった。その意味でも, 白人作家による混血のヒロインの成功物語は, 人道主義的な温かさを伝えるものであったのだ。本論では, 「パラダイス」「牢獄」「ヴェール」「決闘」等のシンボルが示す, 性的搾取に絡む奴隷制と父権制の関係, 人種融和への期待を分析し, このロマンスの理想と限界を探る。

1. 「パラダイス」と「牢獄」

元来, 〈異人種間結婚〉と言うテーマは, チャイルドの基本的な姿勢に近いものだったらしい。彼女の第一作目の小説『ホボモク』(Hobomok, 1824) は, アメリカで初めてインディアン (Native American) と英国女性の結婚について描いたものだ。しかし, 『共和国ロマンス』の問題点の一つは, 白人のように白い肌を持つ主人公の黒人混血児姉妹が美しく才能豊かであるが, 黒人奴隷の束縛を逃れ, 白人社会で如何に生きていくかということであった。この姉妹は, 共に中産階級の白人男性との結婚に成功するが, 作品のリアリズム的な手法が作家の意図とは異なり, 多くの文化的な問題点が噴出することになる。

作品の中で主人公ローザとフローラは, アメリカ社会の負の遺産を背負い, 同時に未来の希望を象徴する。二人の両親は, アメリカの奴隷制導入の歴史を物語る。スペイン人が西インド諸島と本国に奴隷制度を導入し, フランスもアメリカもそれに追従したので, ローザとフローラのスペイン人の祖父は, フランス領西インド諸島で混血 (mulatto) の祖母を買い, 彼女を南部に連れて行った。さら

にボストン商人である姉妹の父親が、ニューオリンズでその娘ユーレイラをスペイン人の父親から買ったのだった。これが姉妹の母親になる。しかし、二人の父親ロイヤル氏 (Mr. Royal) がニューイングランドの出身という事実は、もうひとつのアメリカの歴史的事実を強調する。北部の商人が南部のプランテーション経済の創設に重要な役割を担ったのだ。ロイヤル氏の南部移住とその後の奴隷制度との関わりは、最終的には、奴隷制度と父権制度、南北のカースト、階級、経済搾取のシステムを物語る。

物語は、花々の咲き乱れるニューオリンズの夜から始まる。彼女たちの父親がボストン商人キング (Alfred King) 氏を家に招待するのだが、翌日、父親は彼に向かって、「娘たちの才能が、どのように評価されるのか知りたい」と言う。キング氏の反応は現代の読者と同じである。彼は前日に、南部の荘園所有者フィッツジェラルド氏から姉妹は octoroon であり、父親の本当の娘だが、奴隷の身分だと聞かされていたのだった。

彼の思いは、ローザの輝く白い面立ちや波打つ黒い髪と言う特徴を、それが虐げられた人種…と関わりのある特徴と分かってても、美しくないとは思えなかった。…しかし彼は、不当な社会的制度によるふたりの社会的身分を痛ましく感じたのだった。(p. 14)^x

歌やダンスの才能を発揮する姉妹を描いて、チャイルドは人種に関係なく、どんな人間も教育や訓練で才能を開花させることができると主張している。コッペルマン^{xi}は、チャイルドが貴婦人となる黒人と黒人の混血の女性を初めてヒロインに据えて描いた白人作家であり、「人種的な他者」である解放奴隷や黒人の性格を威厳や人道主義を持たせて描いたと評価している。

キング氏はローザへの慕情を抑えてボストンへ戻るが、この姉妹に悲劇が待っていた。まもなくロイヤル氏は負債を抱えたまま亡くなり、姉妹は競売にかけられることになる。ここで奴隷制度とその残酷さが、暴露される。キャロライン・カーチャーは、「人種差別に抗議し、白人優位主義と男性支配を描く手段としては、悲劇の quadroon の原型は高度に曖昧性が残る」^{xii} と述べている。(カーチャーは、quadroon と述べているが、実際小説のヒロイン姉妹は、octoroon である。) quadroon である女奴隷の性的搾取の設定は、優雅で白人とも言えるヒロインだからこそ適任なのであり、それは逆に奴隷制度反対の小説が目指す偏見を助長する恐れがあると言うのだ。だが、問題は多くの混血児の存在なのだ。アメリカの奴隷貿易は 1808 年に禁止されたにも拘わらず密貿易や荘園主たちにより奴隷の人口は増加し続けた。フレデリック・ダグラスによれば、本人もそのひとりであったが、当時どの荘園にも主人そっくりの奴隷の子どもがいたということだ。これらの混血児たちの白人・黒人文化に引き裂かれた心の内を誰が問うのだろうか。そのひとつが passing の主題なのだ。

本来、チャイルドが目指したのは、異人種混交の結婚を認めて、父権的人種差別主義に反対することである。アメリカの奴隷制度は、可視の論理に依拠している。それは「白」「黒」の色に表象される道徳的、知的、生物学的な差異に訴える。実際には人の肌はピンクや黄色や茶色であるのに、その不合理な法律や社会制度により当時のアメリカでは二つのカテゴリーに人間を分類するのに慣らされる。悲劇的な octoroon 姉妹の物語はこの人種差別の不合理性に焦点を当てる。ローザとフローラは白人のように白い肌をしているので「白人」として通る。しかし姉妹の見えない「黒さ」は、父親の財産の一部として競売にかけられる。しかも、彼らの可視的な「白さ」は姉妹の「黒さ」の価値を高めるのである。これが悲劇的だがばかげていないのは、小説でも現実でも、正当な白人を「黒人」と

して奴隷に売ることができたからである。

例えば、姉妹は父親の死後荘園所有者フィッツジェラルドにかくまわれ、ローザはフィッツジェラルドの赤ん坊ジョージを出産するが、彼の本妻リリーの子、ジェラルドと取りかえるのだ。その後姉妹は別々に荘園から逃亡するが、逃亡中に召使いタレーと赤ん坊と別れ別れになる。この間召使いのタレーと、取りかえられた赤ん坊ジョージが奴隷商人に誘拐され、タレーがその赤ん坊は「白人の貴婦人」の子どもだと言っても、奴隷商人たちはせせら笑い、「白い黒人なんて山ほどいる」(p. 372)と取り合わない。作者は、「白人」の財産確保、つまり奴隷制度維持のために北部と南部が必死に結託し、投資する様を描いている。

この作品の前半は、典型的な slave narrative であり、自由を目指す姉妹の逃亡物語、逃亡と追跡のプロットが展開する。姉妹は、それぞれ別に奴隷所有者フィッツジェラルドから逃げることになる。フローラは、フィッツジェラルドに性的奉仕を強要され、隣家の客ディレイノ夫人 (Mrs. Delano) と共に、ボストンへ逃亡する。ローザはフィッツジェラルドの子を身籠るが、彼は北部商人の娘ミス・ベルと結婚し、新妻をこの屋敷に伴う。ローザは自分が欺かれたことを知り、4ヶ月間病気に伏した後、彼の子どもを出産する。ローザはニューオリンズ時代の声楽の師マダムとシニョールに助けを求め、イタリアへ逃亡する。皮肉なことに、「パラダイス」のような美しいニューオリンズの館、そして緑陰したたるジョージアの荘園は、姉妹にとって「牢獄」だったのである。

2. 「ヴェールの女」影の人間

第一章でローザに恋するキング氏には、社会的偏見の強い病気の母親がいる。彼の想いが、ロイヤル家のニューオリンズのローザに出会った「あの魅惑的な部屋」にたち戻る毎に、ボストンの家族が、彼と彼女たちの「妖精の国」の間に「氷山」のように立ちはだかるのであった。この心象はある社会が人種的な壁を立てる時、文化的貧困をもたらすことを示している。キング氏は、ローザに具現化された芸術を求める瞬間、彼は人種偏見という結婚の障害物を「克服できない」と悟るのである。

南部では、ロイヤル氏の理解通り、その障害はより厳格に法的なものであった。当時ルイジアナ州の法律が、異人種間結婚(黒人と白人の結婚)を禁止していたので、ロイヤル氏が娘たちの母親を解放しない限り、ローザもフローラもまた、法的には、奴隷である。彼らを脅かす危険を具現化したのが、派手なジョージア州の奴隷所有者フィッツジェラルドである。彼もまたローザに求愛し、「もし私が、オスマントルコのお偉方 (Grand Bashaw)^{xiii} であれば、ふたりを私のハーレムに入れるのだが」とキング氏に打ち明ける。つまり、北部では「氷山」となる人種的な結婚禁止条項が、南部では逆にハーレムを生む結果となるのである。

「ロイヤル姉妹を自分のハーレムに」と願う彼の夢は、予兆となる。小説の初めから一年後、ロイヤル氏は破産したまま亡くなり、二人は競売にかけられることになる。フィッツジェラルドが娘たちを秘密裏に隠すことを申し出ると、結婚しないでこの家から出てはいけないという父親の遺言通りに、ローザと結婚するという条件で姉妹は承諾する。(二人は社会から隔離されて育ったため南部の異人種間結婚の禁止条項に無知であった。)数週間後、フィッツジェラルドはジョージア海辺の荘園の隠れ家に二人を住まわせる。それは二人にとってニューオリンズの館よりさらに不吉なものであった。

フィッツジェラルドとロイヤル氏の類似点は、姉妹が認識するよりもはるかに多い。どちらも虚妄の生活である。ローザとの結婚は、彼女の母親同様合法的でないし、さらに二人は自分たちを自由だ

と思っているが、奴隷の身分である。二人の「合法的な所有権を獲得するために」、フィッツジェラルドは、公には逃亡中の姉妹のために、ロイヤル氏の債権者たちに2500ドルの支払いを取り決める。姉妹たちにとってどちらの家でも、社会から隠匿し孤立せざるをえなかった。ニューオリンズで、ロイヤル氏は「妻」同伴の社交界から身を引き、娘たちを信頼のおける友人だけに会わせていた。二人は、不安定な社会的身分同様、父親の葬儀には長いヴェールが必要だったし、ジョージア州でも、フィッツジェラルドは、二人に住人や屋敷から隠れることが必要だと言い、外出時には必ず「厚いヴェールをつけて」土地の者と口をきかないように厳命した。姉妹は、文字通り「ヴェールをつけた女」つまり、影の人間であった。その役割は、肉体的に税金は課せられるがその意志は問題とされない、まさに共和国内の黒人奴隷であったのだ。

3. 「わたしは、すべてあなたのもの」－父権制社会の欺瞞

第一章は、ローザやフローラのような女性が「この不当な法律」から逃亡できるか？ という問いを投げかける。ロイヤル姉妹が意識せずハーレムの奴隷に落ちていく過程を通して、チャイルドはもう一つロイヤル家とフィッツジェラルド家の類似点を示唆する。どちらの家庭も、父権制と奴隷制が同義語なのであり、女性はどのような観点からも、家長である男性の「財産」なのである。

チャイルドは、間違いなく二つの制度を等しいと考えている。彼女は『共和国ロマンス』の執筆中、「インディペンデント」(*Independent*) 紙に掲載した評論「女性と参政権」で、「父権社会は、妻や子どもを敵から守るために夫や父親に絶対的な権利を与える保護制度として始まった」と述べている^{xiv} (pp. 396-401)。従って、フィッツジェラルドがローザを脅かす債権者や競売や好色な求愛者から守ることで、その権利を獲得するのは決して偶然の一致ではない。「何があっても」と、彼がローザに「おまえは私以外の男の財産にはならない」と言う時、ローザは奴隷制度の言説にひるむのだが、彼は父権制の受け入れやすい言葉に置き換えてローザを説得する。「わたしはただ、お前のすべてがわたしのものになることがうれしい、という気持ちを伝えたかったのだよ」と。ローザは、妻が全身全霊をかけて夫のものであるという父権制度を黙認するように育てられており、チャイルドが読者に示すように、奴隷制と同じ現実がその言説に含まれていることを理解していなかった。

ロイヤル家において、父権制は慈悲深い顔をしており、父権制度の女性に対する真実の関係はある程度、緩和されていた。しかしフィッツジェラルド家では、父権制の意味が明確に現れる。家長は姉妹の立場を理解させるため、奴隷の主人の顔をのぞかせ、妻を保護する夫はハーレムの持ち主スルタンの道を歩み始める。

妻を奴隷の身分のままに放置したロイヤル氏の不道徳性を語りながら、チャイルドは、父権制と奴隷制が北部においても手を結んだことを示す。フィッツジェラルドの花嫁リリーは、富裕なボストン商人の娘である。彼女の結婚は単なる経済的な取り決めだったから、ローザが自分の身分に無知であると同様、リリーは自分の地位に無知で、その上ローザの存在さえ知らないで、リリーは自分もまた、父権制と奴隷制の犠牲者であることがわからない。つまり夫は彼女を父親の富のために買い、彼女の父親は、彼女の夫の農園と南部のビジネスのため彼女を売ったのである。実際、リリーもまた、北部の強い人種的偏見と奴隷制度支持の意見を父親と共有している。だが、最終的には、彼女は自分の運命が複雑にローザと関係していることを知る。

4. 「ああ、不実の人よ、汝の咎（とが）はあまりに深い」

この物語は、逃亡後、ローザがローマでオペラ歌手として舞台上に立ち、聴衆の中にかつての偽りの夫、奴隷所有者であるフィッツジェラルドと、その妻の姿を認めるところでクライマックスを迎える。歌劇『ノルマ』(Norma)^{xv}はこの頃アメリカで最も人気のあるオペラだと言われているが、ローザの運命と重ね合わせて、チャイルドは劇中劇として最もスリリングな場面を創作した。この頃チャイルドは、音楽評論家ジョン・サリバン・ドワイト (John Sullivan Dwight 1813-1893) との親交を再開した。彼に宛てた 1866 年 10 月 13 日付けの手紙で、ベルリーニのオペラ『ノルマ』の歌詞と、英訳書を送ってほしいと頼んでいる。また、ヨーロッパ世情に詳しい友人セアラ・ショー (Sarah Shaw) に、オペラハウスの様子や、歌手の見振りや聴衆のこと等質問を浴びせたと伝えられる。歌劇『ノルマ』のあらすじは小説のプロットに活かされており、愛する人の裏切り、愛人との子どもと一緒に死のうとすところなどが酷似している。

物語は、紀元前 50 年、ローマ帝国支配下にあるガリア地方 (フランス) の巫女であるノルマが密かに総督ポリオーネとの子ども二人を育てていたのだが、彼の心が若い巫女アダルジーザに移って行くのを見て、子どもとの心中を思い反乱さえ企てる。ローザは、かつてフローラとジェラルドと歌った有名な三重唱や、月影に向かって歌った「清らかな女神よ」(Casta Diva) を思い出し、力強い声で聴衆を魅了する。次にアダルジーザ役と二重唱で、「彼の人を見よ」と歌った時、ローザは偶然ごく近くの栈敷席にフィッツジェラルド夫妻の顔を見たのであった。一瞬息をのんだローザであったが、彼女は彼に向かって「臆せよ、不実の人よ、汝の咎（とが）はあまりに深い」と歌い、その妻に向かっては「ああ、あの人の手管にあなたはだまされたのよ」と歌いかけたのだった。ノルマが子どもを殺そうとする場面では、ローザは怒りのまなざしをフィッツジェラルドに注ぎ込み、「死より悪い汚辱がふたりを待っている。奴隷になるかですって？ 否！ 否！」ローザは女王のように頭を上げつつ、自らは火刑場へ行く激しい決意を、その印象的な独唱にたたみ込んだ。

当然ながら、ローマ帝国の総督ポリオーネとガリア地方の巫女ノルマの関係が、奴隷所有者フィッツジェラルドと奴隷ローザの関係の類似性へと読者を誘導する。帝国が強大な軍事力をもって植民地を獲得し、弱者である女性の性的搾取が実践されるという古代からの政治的な抑圧関係が、19 世紀のアメリカ国内で奴隷制度として再現されているのだ。フィッツジェラルドは彼女のまなざしと歌の勢いにたじろいだ。聴衆はこの台詞にそんなに感情を込めたのを聞いたことがなかったので、ある者はそれに首をかしげた。しかし彼女の美しい声と物腰、そしてあふれ出る感情が満場の人々を圧倒し、見事な感情移入の場面として認められ喝采されたのだった。

ここは、ローザが初演する夜の場面であり、この舞台の成功によって読者は音楽界におけるローザの将来に期待するところであった。しかし、翌朝さっそくフィッツジェラルドの訪問とキング氏の小競り合いがあり、緊張と悲劇の場面は一転して、コミカルでむしろ Farcical なものになる。動揺を隠せないフィッツジェラルドは、オペラ終了後、すぐにローザのところへ行こうとするのを妻に引き留められたのだが、翌朝ローザのマンションを訪問する。父親代わりにシニョールに乱暴に「帰れ」と言われ、彼はピストルを抜くことになる。そこで「まあまあ」と割って入った紳士が四年前にフィッツジェラルドとニューオリンズの屋敷で会ったキング氏であった。この後、息子ジョージの死という精神的な重荷を抱えたローザは徐々にキング氏の愛を受け入れていくことになる。

5. 息子の取りかえ事件と「綿花王」号の沈没

小説の前半部が、アメリカ社会における黒人の抑圧を明らかにするのに対して、後半部分は、南北戦争後その悪循環を阻止し、人種的偏見を超越し、人々の自由と平等の下に共和国を再建できるか確認する試みである。チャイルドは社会全体を視座に入れながら多様な登場人物を提示する。

登場人物の中には、変貌する社会を前に好機を逸し、成長できない者たちがいる。最も頑固な例は、リリー・フィッツジェラルドの父親ベルであって、彼は北部の奴隷制支持者で綿花業に携わるホイッグ党を代表し、奴隷保有者同様に奴隷制度に深く関与している。キャロライン・カーチャーによれば、彼の名前ベルは、1860年から61年の奴隷制反対派に反乱を強行し、リンカーンと並んで1860年の大統領選挙に立候補した人である「護憲派」(p.316)を標榜する、護憲的連邦主義者ベル・エベレッツ(Bell-Everetts)^{xvi}に因んでいる。所有する商船に「綿花王」と命名する彼は、奴隷制度が持つ残酷な力を象徴する。二人の夫婦奴隷が「綿花王」船から逃亡を図ったところを捕まると聞くと、彼は孫の青年ジェラルドに向かって、奴隷制反対運動家が彼らを救い出す前に、彼らを密かにボストンから出航させ正統な手続きなしにニューオリンズに送り返すように指図した。彼の残酷性は彼自身の家族にも及ぶ。ベルは、ジェラルドの体には黒人の血が流れていることを知らされ、遺産相続を取り消す準備をする。だが、本当の孫は彼がたった今そのムラト(黒人白人第一混血児)の妻と一緒に奴隷制に戻したばかりの逃亡奴隷ジョージだと聞かされた時、ベルは怒り狂う。

お前にはわかるか、わしのようなひとかどの人物が、自分の財産をニグロに与えようとするものか。…わしの財産は、お前さんの言うように黒人の血の流れているジェラルドか、或いは、ニグロの妻を持った奴隷に相続しなければならないんだと！(pp. 393-94)

このエピソードは、奴隷制を支持する北部貴族の精神性を辛辣に語っている。人種の融合や異人種結婚は必然的なものとチャイルドは示唆するが、彼女は、どんなに懇願されようとも、ベルのような人が意志を曲げないことを認識している。彼は自分の利益を度外視しても、黒人に対して譲歩するくらいなら自殺するだろう。だから、彼は癲癇の発作で亡くなるのである。

だが、同じように人種差別者のベルの娘リリーには、ともかく新しい人種社会に表面的には適応する兆候がある。彼女の反応は、単にジェラルドを自分の息子だと偽ることだ。「わたしはあの子を諦めることはない」と言い張る。「あの子はわたしの腕の中で眠り、わたしは子守歌を歌ったわ。わたしは彼に讚美歌や歌を教えたし、彼はわたしを愛してくれた。」彼女の忠誠心はあっぱれである。ただ、彼女はジェラルドの血筋を公表することは頑として受け付けないし、また、実の息子に興味を示さない。「奴隷の中で育った息子がいるなんて、不快だわ。」彼女は抗議する。「わたしは息子をわたしと同じように教育した。みなが彼は上品な若者だと言っている。」(p.386) 結局、リリーにとって、外見と形式が一番大切なのだ。ジェラルドが白人紳士として振る舞い、世間の目からそう映るのならば、彼女は彼を自分の息子として認めるであろう。もし彼が公的に黒人として「黒人」の妻を娶るならば、彼女は大胆にも宣言通りその関係を断ち切るだろう。しかし小説最後には、個人的な悲劇が彼女にさらなる変化をもたらす。ジェラルドが南北戦争で死亡するのだ。リリーは、彼女の本当の息子とそのムラトの妻との子供、quadroonの孫と一緒にいるのである。彼女は、その孫娘と義理の娘を「奇妙で複雑な感情」で眺めて、「ベルがいたら何と言うだろう」と思う。(pp. 421-22)

6. 「希望の星」の死

ベル親子と正反対の登場人物について、チャイルドは奴隷制を解体するため様々な解決法を示す登場人物を用意した。ローザの息子ジェラルド、フローラを養女にするディレイノ夫人、そしてローザと結婚するポストン商人アルフレッド・キング氏などである。

ジェラルドは自分の素姓を認識した後、間もなく北部で自分の代わりに奴隷として売られた白人の異母兄弟ジョージに出会う。彼は徐々に黒人の強制労働や、人種や相続財産について再検討せずにはいられなかった。異母兄弟から、奴隷の身分が何であるかを学ぶ。彼はまた、奴隷と「上品な紳士」との相対的な価値を検討する。彼は、恵まれて育った自分が異母兄弟にとって教えてやれるものは少なく、読み書きができ機械工で修理できる彼の方が実社会で役立つと考える。(p. 408) だが、彼は、南北戦争で死亡する。奴隷制や法的差別を解決する「希望の星」だったのに。このこと自体が、南北戦争後の社会再建の難しさを物語っている。

同時にチャイルドは、兄弟の取りかえ事件で常識の転覆を図っている。生まれつき黒人は奴隷に、白人は主人になる特質があるという人種的偏見を覆すのである。ここでは「黒人」の弟が紳士で、その「白人」の兄が奴隷なのだ。「顔つき」や「皮膚の色」について二人は区別できない。二人を隔てるものは、彼らが生育環境から修得した行儀作法と技術である。結論はもちろん、人間は人種的な範疇よりも環境の産物だということである。

作品の中で国家の新しい方向に向かった登場人物で、最も興味深いのはディレイノ夫人の変貌と成長である。未亡人の彼女は、フローラがフィッツジェラルドの農園から逃亡するのを助け、最終的には彼女を養女として迎える。それまで、彼女は北部における中産階級の奴隷制廃止運動の煽動を蔑視していた。もし一目でフローラの肌が黒人のように黒かったら、フローラはディレイノ夫人の同情を得られなかっただろう。また最近娘を亡くした年配の女性にとって、フローラの自発性、豊かさ、「自然な行動力」の魅力は強く、彼女の愛着は、フローラに黒人の血が流れ、奴隷の身分であるという真実を告げられても、耐えられる程だったのだ。彼女は徐々に以前の偏見から遠ざかり、結局は反奴隷制運動家と交わるようになる。「なんて彼女は変わったのかしら！ …そのうちニグロ・パーティを開くんじゃない」と流行の衣服をまとった彼女の昔の知人たちは呆れた。

ディレイノ夫人が経験した文化的な変化は、チャイルドの期待する人種や階級、文化の融合のもたらす結果の先ぶれであり、それ以上に重要である。初めの頃、ディレイノ夫人はフローラを「ニューイングランド流に教育しよう」(p. 209) とする。しかしフローラがディレイノ夫人の「伝統的な行儀作法」に反抗した時、彼女はフローラの「その特別な経歴と天真爛漫さのため、わたしは彼女を教える以上に教えられている」(p. 151, 269) と認識する。まもなく、彼女は上流階級の「行儀作法」を克服し、フローラの「素朴な民衆」への偏愛を共有し、屋敷をフローラの「トロピカル」趣味で飾り立てる。

ディレイノ夫人がフローラを養女にするというシナリオで、作家チャイルドは、黒人をアメリカ社会に融合させることに希望を託したようである。だが、小説のリアリズム形式が、それを許さなかった。ディレイノ夫人がフローラの将来を心配しているように、「アフリカ人の血筋を持つ娘と誰が結婚するだろうか？」フローラのケースはイエスであったが、これは必ずしも適切ではなかった。フローラは、ブルメンタール氏 (Mr. Blumenthal) と結ばれたが、彼は特別だったのだ。ロイヤル氏の事

務員で子どもの時からフローラを知っていた彼は、ドイツ生まれの孤児で、社会的なアウトサイダーである。アメリカの人種的な偏見から免れていたのだ。従って、彼はディレイノ夫人が熟慮した難題の純粹な解決とはならない。むしろ、チャイルドがこのような人物を提示することは、アメリカ人が人種的な偏見を克服することが無理と考えているか、ヨーロッパ移民なら啓蒙的な行動をとり得るといふ誤謬をも物語っていると言えるだろう。

同じ欠点があるが、キング氏とローザとの結婚でも言える。キング氏は、偏見の強い母親の死後、ようやくローザのことを思い出すのだ。とは言え、彼自身は、人種差別を払拭し、女性の自由を阻む父権制から解放し、新しい社会秩序を創造するように思われた。彼が初めてローザに会い恋に落ちてから彼女に求婚するまでの間、彼女はフィッツジェラルドの偽の結婚の犠牲者となり、逃亡後はオペラ歌手として舞台上に立ったが、当時の歌手は娼婦より少し上の身分にすぎない。(pp. 245-46)「このあてにならない世間的な名誉」を否認し、キング氏は人種社会の肩書と、性的純潔の評価を非難する。彼は、妻にオペラの代わりに家庭に入るように薦め、職業で彼女が勝ちとった独立を犠牲にするように求める。(p. 252) ローザは、妻として夫に依存する退行状態にはいり、キング氏は彼女を父親のように保護下に置こうとするのだ。果敢に自由を勝ち取り、オペラ歌手になったローザとは趣を異にしたこの結婚に、読者はロマンスの終わりを感ずるだろうか？ ディレイノ夫人とフローラの養子縁組のプロット同様、キング氏とローザの結婚というプロットは、黒人を依存者、白人を親権のある保護者と定義している。

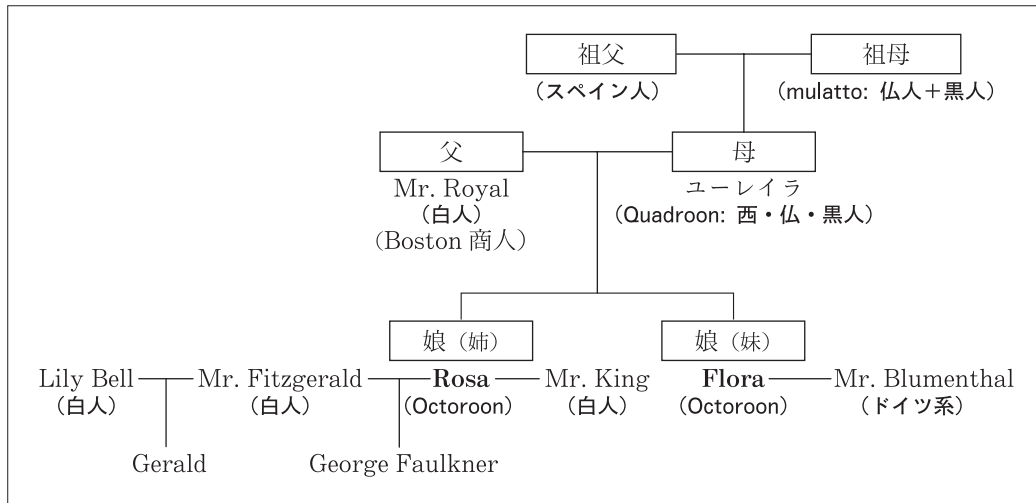
だが、キング氏はロイヤル氏、キング氏、フィッツジェラルドの家族に起こる奴隷制の被害を解くため責任を全うする。キング氏が開始したのは、ローザの息子の代わりに奴隷として育てられた異母兄弟ジョージ・フォークナーの教育である。彼は白人であるが、解放後ムラトールと結婚したため、白人として通る (Pass) のは不可能である。チャイルドの友人エリス・ロアリング (Ellis Loring)^{xvii} が黒人の下男ウィリアム・モリス (William Morris) を弁護士に訓練した例に倣って、キング氏は、将来ジョージをビジネスパートナーにする予定で、彼をマルセイユで働かせることにした。キング氏によれば、ジョージをヨーロッパに派遣することは、アメリカ国内では有色人種、つまり黒人の妻を持つことに「我々の排除できない障害」があるからだ。チャイルドの理想とは異なり、またしても現実には黒人が暮らしていくのはきびしい。

本質的な点で、チャイルドのプランは、黒人の向上計画をそこなう父権制主義から免れない。たとえば、キング氏は、ジョージの将来を決定する際、彼やその家族に相談する意志もないし、黒人を独立心のある自由な人間と考えていない。チャイルド自身の人種差別主義がここで非難される。ここには 19 世紀になされた解放奴隷の教育が、黒人を白人の社会に認めるため、黒人の「白人文化」化のみ強制され、人種混交によりもたらされる文化交流、南部やアフリカの豊かな伝統が一切認められず、一方向の物語となる嫌いがある。

おわりに

『共和国ロマンス』の抱く展望は、小説の終わりの場面に象徴されている。南北戦争の終焉を、ロイヤル姉妹の家族が集まり祝う場面である。フローラが子どもたちを見ながら、夫のブルメンタールに「ここにはみな混血で、アフリカ、フランス、スペイン、アメリカ、ドイツの血の混ざった特徴があるだけで、はっきりした人種の特徴はないのよ」と。これがチャイルドの合衆国に対して期待する

〈資料1〉 *A Romance of the Republic* by Lydia Maria Child 登場人物相関図



夢なのであった。しかしながら、この家族の肖像には未だ人種的な階級意識が残存する。チャイルドの人種融合の理想は、彼女がこの作品で徹底的に解剖した社会秩序に代わり、満足するものを創造するには、あまりに白人優位主義が残存していた。白人黒人の平等なパートナーシップの隠喩として、異人種間結婚は父権制度の不平等性の下に失敗する。19世紀のアメリカ社会で、妻は父権制の下に法的死 (Legal death) を蒙り個人としての立場を失い、文字通り夫の付属物となるからである。結婚というプロットが必然的に課す父権制の因習の中で作品を描きながら、チャイルドが、真に平等で多文化的な社会を描くのは不可能であった。かくして、前半の華々しい自由へのあこがれ、逃亡奴隷の物語は、後半の新しい国家再建の物語の中で、姉妹の結婚が問題を抱えながら出発していることで、前進の力が落ちていく。だが、終りの数章の登場人物たちの日常こそ、そしてチャイルドが写實的に、現実に筆をすすめるほど、彼女の理想や夢がはるか遠くに浮かんでくるという逆説的な転換が起こる。南北戦争直後のチャイルドには、この物語はロマンスにちがいがなかった。

だが、如何に理想主義的であっても、チャイルドの異人種間結婚という目標は、多文化社会の構築において有意義であるばかりか、必要不可欠なものである。しかし当時は、時代の風潮としてそれを許さない時期であった。同年の1867年、レベッカ・デイヴィスの書いた『評決を待って』 (*Waiting for the Verdict*) では、主人公の医師ブロードリップ博士がムラトールであることを恋人に告白すると、彼女は「黒人と白人の間は神が渡ることを禁じたものだ」と述べて彼と別れるのである。また当時、ニューヨークで大評判だった演劇『オクトロオン』 (*Octoroon*) は、やはり肌の白い黒人混血の女性が最期に服毒自殺をする。だが、この芝居がロンドンで公演される時は、ハッピーエンドだったとの記述があるほどだ。未だ人種的偏見の強いアメリカの社会で、啓蒙的な意図があるとしても、白人紳士との結婚をする *Octoroon* のロマンスを描いたチャイルドの勇気に改めて敬意を表したい。

注

- i *Liberator*, *the National Anti-slavery Standard*, *the New York Independent* 等の新聞は社説に競ってチャイルドの反奴隷制運動の記事を掲載しようとしたと言われている。James M. McPherson: *The Struggle for Equality: Abolitionists and the Negro in the Civil War and Reconstruction*

- (Princeton, N. J.: Princeton UP 1964)
- ii チャイルドは、それまで自由に出入りしていたマサチューセッツ図書館の出入りを禁じられた。また、ハーバード大学のジョージ・ティックノー (George Ticknor) 教授は、彼女を戸口でびしゃりと閉め、街で会っても挨拶をしなくなった。他の知人たちにも彼女との交流を禁じ、その掟を破った者は破門としたと言われている。(Karcher: *The First Woman in the Republic*, chap. 8)
 - iii ヴァージニア州の州知事 Henry Wise に、チャイルドはジョン・ブラウンを擁護したいという手紙を出した。彼女のジョン・ブラウン擁護の記事により、徐々にブラウンが単なる暴徒ではなく、奴隷解放という高潔な目標のために勇気を持って身を捧げた聖人であるとの考えが浸透し、彼女はブラウン神格化に寄与したと言われている。ヴァージニア州知事 Henry Wise は、Child への書簡「身の安全を確保しますが、ブラウン反逆事件を導いた道徳的状況を作り出したことで非難されるでしょう。」を公開した。これを契機に、それまで禁止されていた彼女の記事や著書が南部でも出回り始めた。
 - iv *A Lydia Maria Child Reader*: edit. by Carolyn L. Karcher (Duke University Press 1997) p. 263
 “Coal-black Rose” was a popular minstrel song. 翻訳は筆者。原文は以下の通り My own belief also is that prejudice against complexion is entirely founded upon pride, and grows out of the debased and degraded condition in which our laws and customs keep the colored people. This is sufficiently proved by the fact that slaveholders have the utmost horror of *legalized* amalgamation, while they have none at all of *illegal*. They would consider their families disgraced forever if a son should *marry* the most beautiful and intelligent of quadroons, but are quite undisturbed by his brood of illegitimate mulatto children, owning some “Coal-black Rose” for their mother.
 - v 作者: Dion Boucicault
 - vi Edit. Cowley, Malcolm. Hawthorne, Nathaniel. *The Portable Hawthorne* (Penguin Book 1976) p. 327
 - vii Chase, Richard. *American Novel and Its Tradition* (Johns Hopkins University Press 1980). リチャード・チェース『アメリカ小説とその伝統』待鳥又喜訳 (北星堂書店 1960)
 - viii Carolyn Karcher, *The First Woman in the Republic* (Duke University Press 1994) pp. 487-531
 - ix Frances Harper: *Iola Leroy*
 この小説のヒロインは、白人で奴隷廃止論者 Dr. Gresham の息子から、彼の家族からも彼の求婚は歓迎されていると言い、彼は彼女が黒人社会のために仕事をするのを認めると言いながら、彼女が黒人であることを表明することにためらうと、凜然としてその求婚を断るのであった。彼女はそんなことをしたら、彼女を白人と思い自由に黒人について物を言った人、そして彼女の素姓が分かると、彼女を自分たちの家から締め出す人が彼女を侮辱するだろうと言うのである。
 - x Lydia Maria Child, *A Romance of the Republic* (The University Press of Kentucky 1997)
 - xi Susan Koppelman, *The Other Woman: Stories of Two Women and a Man* (Old Wesbury, N. Y.: Feminist Press 1984) p. 2
 - xii Carolyn Karcher, *The First Woman in the Republic* (Duke University Press 1994) p. 487
 - xiii オスマントルコ、政府高官。pasha
 - xiv *A Lydia Maria Child Reader*, ‘Woman and Suffrage’ pp. 396-401
 - xv 『ノルマ』 (*Norma*) は、ヴィンチェンツォ・ベッリーニが作曲、1831年にミラノのスカラ座で初演された全2幕からなるオペラである。マリア・カラスによればこのオペラは主役を歌うソプラノ歌手にとって最も難度の高いオペラの一つである。ソプラノのアリア「清らかな女神よ」 (*Casta Diva*, カスタ・ディーヴァ) は特に有名である。
 - xvi ジョン・ベル (John Bell) は、テネシー州の奴隷所有者であったが、1860年の大統領選挙に「憲法と

連邦と法律の実施の他は何の政策も掲げずにこの選挙のために新たに結成された「立憲統一党」(The Constitutional Union) から立候補し、マサチューセッツ州のエドワード・エヴェレットを副大統領候補とした。彼らはヴァージニア州、ケンタッキー州、テネシー州で勝利したが、チャイルドは、ボストン商人であるベルを命名することによって、北部が南部と共謀して奴隷制度を維持していることを強調した。

- xvii Ellis Gray Loring Child の夫 David の Boston Latin School の後輩で弁護士、David, Garrison, Sewell 等, the New England Anti-Slavery Society の創立メンバーである。Ellis と Louisa は長年、チャイルドの友人であった。

参考文献

- Bhanha, Homi, K, edit., *Nation and Narration*, London and New York: Routledge, 1990
- Child, Lydia Maria, *A Romance of the Republic*, Boston: Ticknor and Fields, 1867
Introduction to 1997 edition copyright © 1997 by The University Press of Kentucky, text はこれを使用し、引用文は筆者が翻訳した。
- Child, Lydia Maria, *An Appeal in Favor of That Class of Americans Called Africans*, The University Of Massachusetts Press, 1996
- Child, Lydia Maria, *The Freedman's Book*, 1865
- Child, Lydia Maria, *The Mother's Book*, Boston: Carter and Hendee Applewood Books, 1831
- Cable, George Washington, *Madame Delphine*, General Books LLC Publication, 2009
- Chesnutt, Charles W., *The House Behind the Cedars*, Dover Publications. INC, 2007
- Karcher, Carolyn L., *The First Woman in the Republic — A Cultural Biography of Lydia Maria Child*, Durham and London: Duke University of Press, 1994
- Kenschaft, Lori, *Lydia Maria Child — The Quest for Racial Justice*, Oxford University Press, 2002
- Harper, Frances, *Iola Leroy*, Beacon Press, 1999
- Lowance, Mason, *Against Slavery: An Abolitionist Reader*, Penguin Classics, 2000
- Mayer, Henry, *All on Fire — William Lloyd Garrison and the Abolition of Slavery*, W. W. Norton & Company, 1998
- Norton, Mary Beth, *People and a Nation — A History of the United States*, Houghton Mifflin Co, 1994
メアリー・ベス・ノートン他『アメリカの歴史』本田創造(監修)三省堂 1996
- Morison, Samuel Eliot, *The Oxford History of the American People*, Curtis Brown LTD, 1965
サムエル・モリソン『アメリカの歴史』[3] 西川正身(翻訳監修)集英社 1997

(うえの かずこ 文化創造学科)